

特別寄稿

グシク時代開始期の若干の問題について

——久米島ヤジャーガマ遺跡の調査から——

安里 進

はじめに

沖縄諸島の貝塚時代は、何らかの農耕が行われていたとしても、経済基盤においては採取経済段階の域を出なかったことは恐らく誰もが認めるところであろう。これに対し、グシク時代は麦・米栽培農耕を生産基盤とした生産経済段階に入っていた。

貝塚時代後期からグシク時代への展開は、時間的には、A.D 8世紀頃から13世紀頃の間に行われた。この間に①集落（遺跡）が海岸砂丘からグシク時代的立地の丘陵地帯へ移動し、②土器が貝塚時代後期系の土器からグシク系土器へ急激な型式的変化を遂げ、更に、③いわゆる類須恵器（白木原1971：260～261）の広布と④麦・米栽培農耕が開始、または飛躍的に発展する等の諸現象が相次いで起った。

これらの諸現象相互の時間的関係について琉球考古学では、丘陵地帯への移住と類須恵器の広布は貝塚時代後期系土器が持続する時期に行われ、その後にグシク系土器が登場することが二、三の遺跡の発掘結果を通して信じられているようである。そして、類須恵器の広布と共に米、麦農耕が伝えられ、その契機は南島經營であったと想定されてきた（国分1972：399～412）

ところで、私は1971年8月、10月、1973年10月の3回にわたって久米島のヤジャーガマ遺跡の表面調査を行った。同遺跡は貝塚時代後期系土器とグシク系土器の二型式にまたがり、類須恵器の大破片や土鍋、石鍋形土器、石鍋片、大量の炭化麦、米および穀殼が検出され、しかも、これらの遺物は洞窟奥のC地点において土器型式とのコンビネーションが明瞭に把握された。

本稿は、ヤジャーガマ遺跡の調査報告に加えて、先に述べたようなグシク時代開始期における従来の説について、同遺跡の成果を中心に再検討し、更に、従来問題にされていなかった二、三の注目すべき現象の存在を明らかにしていくとともに、これらの諸現象相互の時間的関係を土器型式編年を軸に考察を試みたものである。

なお、本稿を草するに当たり、多和田真淳先生からは資料の提供や御教示をいただいた。記して感謝申し上げたい。また、ヤジャーガマ遺跡C地点の発見は知名定順氏によるものであり、ここで報告したヤジャーガマ遺跡の遺物には氏の採集品も含まれていることを記しておきたい。それから、拙論掲載の便宜を与えられた沖縄県立博物館学芸員の皆様に感謝致します。

I ヤジャーガマ遺跡

1. 遺跡の周辺

久米島は火成岩から成る 200～300m台の山岳地帯とその縁辺の狭い台地状地形を核として、それに附着したような形で広がる砂泥質の低地帯と石灰岩平地帯から構成されている。島の西側には海拔20～50mの石灰岸平地が発達している。山岳地帯に源を発して小河川がいく筋があり、台地地帯を深く刻み

込んでこの石灰岩平地へ流れている。台地と石灰岩平地との境には处处に大きな凹地が形成され、河川の水はこの凹地へ流れ込みそのまま地下へ潜り込んでいる。この凹地は湿地であるが、逆に石灰岩平地地表は水に乏しい。

現在の石灰岩平地の土地利用は、この凹地や处处に形成されたドリーネ底を稻作等の水田として利用する場合がある。多かたはサトウキビとサツマイモの畑である。

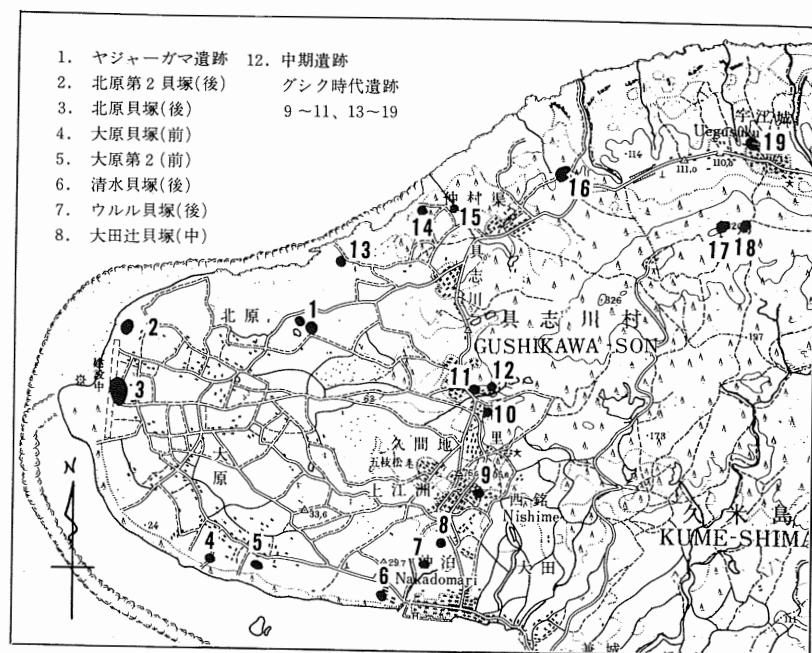
处处にあるドリーネには横穴状に鐘乳洞が発達する例が多い。ヤジャーガマと呼ばれる洞穴もその1例で、この洞穴入口に形成されたのがヤジャーガマ遺跡である。

ヤジャーガマ遺跡から海への最短直線距離は約500m。貝塚時代後期の北原貝塚とは約1.8km離れている。

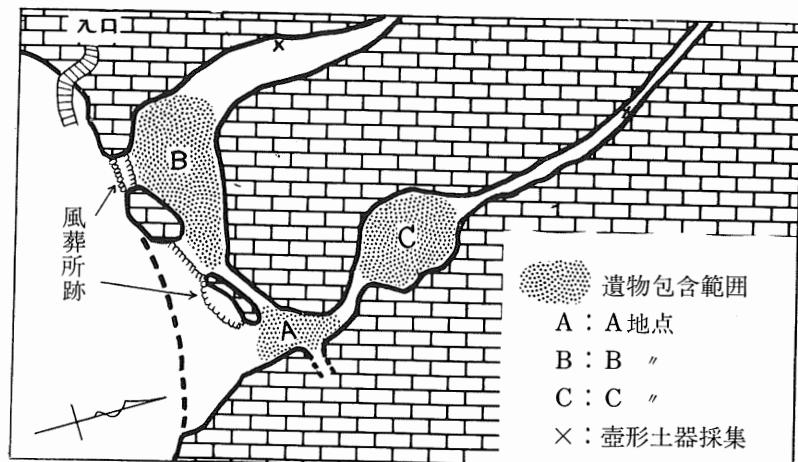
2. 洞窟形態と遺跡

ヤジャーガマは円形に陥没したドリーネ状豊穴から水平に延びた二つの大洞窟と二、三の小洞窟から成る。沖縄大学学生文化協会の報告(1968: 103~104)では北側の大洞窟を第二洞、南側のそれを第一洞と呼んでいるのでこれに従う。第一洞が主洞である。

第一洞は、入口が広く半円形の床面、天井も高く比較的明るくかつ乾燥した場所である。入口の半円



1図 ヤジャーガマ遺跡と周辺遺跡



2図 ヤジャーガマ遺跡略図

形広場は奥行き約10m、幅約15m。床面は天井の落盤による岩片で埋めつくされている。入口の一部は歴史時代の風葬所の石積が残っている。入口広場から降りるように通路を奥へ5m程入ると暗闇になるが、そこにはタカラガイ類、アコヤガイ、ヒバリガイなど小形の浅海性貝類を主体とする貝層が形成され、貝塚時代後期系土器（ヤジャーガマA式）が包含されている。この附近の表面には他にグシク系土器（ヤジャーガマB式）、類須恵器などが散乱している。ここをA地点と呼ぶ。

A地点から更に狭い通路を奥へ5m程進むと10m四方程の広場に至る。この広場には貝層は全く認められず、代って1cm程の薄い木灰層があり、層中からはヤジャーガマB式、類須恵器I類と共に大量の炭化麦、米、穀穀が検出された。土器はB式が圧倒的であるが他にA式も若干散布する。この地点をC地点と呼ぶ。

C地点を過ぎ、泥濘んだ通路を更に奥へ300m程行くと天井が陥て地隙状になった細長い広場に至る。この広場の上、地表面から洞窟にかけてヤジャーガマ遺跡と同時期の遺跡がある。第一洞は更に奥へ続々き、そこから約200m程で出口に至るといわれている。

第二洞の入口は狭くしかも歴史時代の風葬所に使用されている。他に第一洞の入口広場とA地点の側からそれぞれ狭い通路で結ばれている。第二洞は入口や、奥に広場があり貝層が形成されている。貝の種類や表面に散乱する土器等の遺物はA地点と変わらない。ここをB地点とする。第二洞は次第に狭くなり約200m程で行止りとなっている。

3. 遺物

遺物の採集はA、B、Cの三地点で行った。ほとんど表面採集品であるが、C地点では薄い木灰層を若干量持ち帰り炭化物の検出を行った。C地点の遺物散布状況は、地表面に土器、類須恵器の大破片がむき出しの状態で散乱していた。C地点奥の通路上に1個体分の壺（5図2）が潰れた状態で発見された。またB地点奥の狭い岩陰にも1個体分の壺（5図1）が潰れた状態で得られた。

イ、土器

土器は一般に焼成良好で堅緻である。貝塚後期土器の手法を引くA型式とグシク系土器のB型式に分類できる。これらをそれぞれヤジャーガマA式、同B式と呼ぶことにしよう。各地点からA、B両式は採集されるがC地点では圧倒的にB式が主体である。

ヤジャーガマA式（3図）

器形態は深鉢形有文の特殊土器と、貝塚後期の甕形土器の系統を引くが口縁の外反度が弱く鉢形的になつた無文土器の二種があった。

無文土器（3図1～23、27～29）

圧倒的多数を占める無文土器は、底部は径の小さい平底で、胴部への移行部が一担括れるいわゆる“くびれ平底”をなす。器体部は薄く5mm前後で、口縁部は外反度が弱く鉢形土器である。成形は巻き上げ又は輪積を行い指でのばしていく。口縁部と底部にはその痕（指圧痕）が残っている。器面調整はやわらかいものによる“ナデ”を主体とし、他に二枚具の腹縁のようなものによる搔痕（条痕）や“指ナデ”などがある。搔痕は内面に限定されている。器面調整にはこの三手法が併用されている。やわらかいものによるナデの場合、外面は、口縁部を横ナデ、胴体部は縦ナデ、内面は横又は斜めにナデているのが普通である。焼成は良く、焼き締り、一般の後期砂丘の土器よりも堅い。色調は暗褐色が多い。混和材

としては鉱物細片が用いられたものが多く胎土は砂質で軟質泥胎は極めて少ない。

有文特殊土器（3図24～26）

特殊な土器で、胎土は軟質泥胎の厚手。有文土器である。3図24はほぼ全形が推定できた土器である。焼成はや、悪く無文土器より劣る。文様はひきちぎった草茎を二本並べて施文したような二条の巾広の浅い沈線文である。一見前期の二条平行線文を思わせるが全く別で、これに近い文様は中部の具志川グシクから1片採集されている（新田1974：2図4）。口唇にも同一の施文具で深く刻文されて鋸歯状口唇となっている。煮沸に使用された形跡は全くない。25はB地点採集、26はA地点採集品。

ヤジャーガマB式（4、5図）

安定度の強い丸底又は平底の無文土器で、甕、鉢、鍋、壺、碗などの器種をセットにしている。甕、鉢、壺が主たる器形である。焼成極めて良く堅牢。胎土には鉱物細片などを含んでいる。フェンサ上層式の胎土にみられる白砂粒又は貝殻碎片は混和材として全く用いられていない。A式とは胎土でも区別しうる。成形は巻き上げ又は輪積みによる。器面調整はヘラ削り、やわらかい物体によるナデ、指ナデなどが併用されているが、基調はヘラ削りでほとんどの土器片に認められた。全形復元可能な土鍋、鉢、壺等をみると外面は全面的にヘラ削りが施されたようである。内面調整は主にナデを行っている。

甕形土器（4図1～8）

煮沸用の土器で外面には煤がしみつき黒色を呈するものが多い。頸部の屈曲度は壺よりも浅く、肩部もなで肩である。明確に甕形と判断した破片は7片だけである。

浅鉢形土器（4図9～13）

煮沸用の土器で外面は煤で黒く汚れている。内彎した口縁に特徴がある。4図10は器形を復元した破片であるが、底面を除いて他は煤によって黒色化している。4図12は把手の付いた鉢形破片である。4図12、13の把手のある胴部破片も浅鉢形の土器と思われる。把手付の浅鉢形土器は知名定順氏採集品にも1片あり（沖縄国際大学考古研所蔵）、また沖大学生文化協会も1片報告している（沖大文協1968：18図1）。沖大文化協会の1片を除いて他はすべてC地点採集。

鍋形土器（4図14～16）

本来は浅鉢に属する器形に口縁下に鍔をめぐらした鍋形の土器である。4図16は完形品である。鍔から下の部分は煤けて黒化している。しかし、底面は煤の附着はない。鍔の形態からすると石鍋の鍔よりも土鍋の鍔に類似しており、日本の土鍋の模造品と考えられる。4図14は多量の滑石粉を混和材として添加し、一見滑石の石鍋の感がする。4図15はその底部とみなされる。縦に削痕がみとめられる。この2片は胎土や器形から石鍋の模造品と考えられる。すべてC地点採集品。

壺形土器（5図1～10）

壺と判明した土器片は復元個体を含めて11個体である。短頸なで肩の壺（5図5、6、7、9、10。）長頸なで肩の壺（5図3）、前二者の中間的な壺（5図1）および直口肩張りの壺（5図2、8）がある。これらの壺形土器の底部は復元可能な個体や煮沸痕のない大破片の底部（5図11）から推定すると丸底ないし隅丸の平底である。

碗形土器（4図17）

碗の破片は1個体分で丸底と推定される。C地点採集。

底部破片（5図11～13）

底部の大片（又は接合による大片）は3個体分得られた。5図11は壺の底部と考えられ内外面には煤やコゲあとはない。内面には多くの穀殻圧痕が残っている。5図12は丸底で外面は煤によって黒色になっている。鉢又は甕の底部と思われる。5図13は平底で、底面か胴部下半は煤跡はなく胴部上半に煤あとが認められ、甕又は鉢の破片と思われる。

B型式土器は上述のように鉢、甕、壺を主体としている。口縁部破片52片中、鉢と判断されたもの9片、甕は7片、壺は11片であった。しかし、甕と壺は、小破片では識別困難でありそのような破片は18片もあり、その多くが甕ではなかろうかと思われる所以である。いずれにせよ甕と壺の実数は増加する。

ロ、類須恵器（6図）

類須恵器は各地点から得られた。当初採集した破片数ではC地点が他を凌駕したがそのほとんどが接合されて4個体の大破片ができ上った。他の胴部破片も6図3の1片を除いてはほとんどがその4個体のいずれかに属すると考えられる。

C地点の4個体の壺はいずれも薄手で、口唇の作りは丁寧であり頸部の屈曲度が強く、類須恵器I類に属する（類須恵器の分類については47P参照）。

6図6はかなり薄手の壺で文様は波状文と二条の平行沈線文の組合せからI類A式に属するが、平行沈線文直上の波状文は描き出しの部分と描き終りの部分が重っていることから波状文を一本一本描くAI式と考えられる。6図8は胎土や平行沈線文が6と同じく二条の平行線になっていることから同一個体とみられる。この胴部破片内面には変った形の叩文があり、外面には羽状の叩文が認められる。

6図1及び5は無文の大型壺である。内面は共に格子目文があるが外面の叩目は1の場合は平行線文、5は羽状文である。

6図3はA式に属する胴部破片であるが型式は不明。内面は石灰華を覆っていて叩目の形態はわからない。

A地点採集の類須恵器は厚手が多い。口縁破片は6図7の1片であるが例外的な厚みを持つかなり大型の壺である。平行線又は羽状の叩目の一部が外面にみえる。6図2はB式に属すると考えられる頸部破片である。

B地点では3片得られた。うち2片（6図9、10）は底部破片である。

ところで、私は「琉球における原史時代の編年」（安里1972）の中で、ヤジャーガマ遺跡の類須恵器はAI式ではなくAII、AIII式及びB式（II類）があると述べた。しかしそ後の破片接合でAI式が存在し逆にAII、AIII式の明瞭な破片はないこと、そして、B式の口縁形態はI類の範疇にあることがはっきりしたので訂正しておきたい。

二、滑石片（4図25）

刃物によって周囲が削りとられている。一面は煤が附着し真黒になっている。石鍋の底部破片と考えられる。B地点採集。

ホ、貝錘（3図30）

漁網の錘でヒメジャコの殻頂部に孔を穿った製品である。A地点及びC地点で採集。

ヘ、碗状貝製品（3図31～33）

ヤコウガイの殻を切りとり碗状にしたものである。32は魚形碗状製品の尾びれ形の部分と思われる。

漁形や橢円形の碗状製品は貝塚時代後期遺跡からよく出土している。A地点の貝層からA式土器と共に得られた。

ト、鉄斧（4図26）

C地点から完形鉄斧が1個採集された。斧を柄に個定させるために斧への柄の挿入部分に二本の鉄楔が打ち込まれている。この鉄楔の錆のために柄の木質部が一部残っている。石灰を厚く覆った状態で発見されたが、はたして遺跡と関係あるものかどうかは不明である。

チ、炭化麦、米、穀穀（写真1）

C地点の薄い木灰分は石灰層のまざった硬い土で被覆されている。木灰層中には大量の炭化麦、玄米や穀穀が保存されており、その出土量は異常な程である。これは同地点が穀類貯蔵庫として利用されていたことを推測させる。炭化麦、米については専門家の鑑定をまつべきであるが、私の観察では、麦が圧倒的に多く、米はジャポニカ型がほとんどのようである。炭化麦、米は他にA、B地点からも土器に附着した土から得られた。

4. 小結

ヤジャーガマ遺跡の土器はA式、B式の2型式が認められ、両者の先後関係はA式→B式となることは疑えない。両型式と他の遺物の共伴関係はC地点、A地点貝層の状況から次のようにいいうことができ

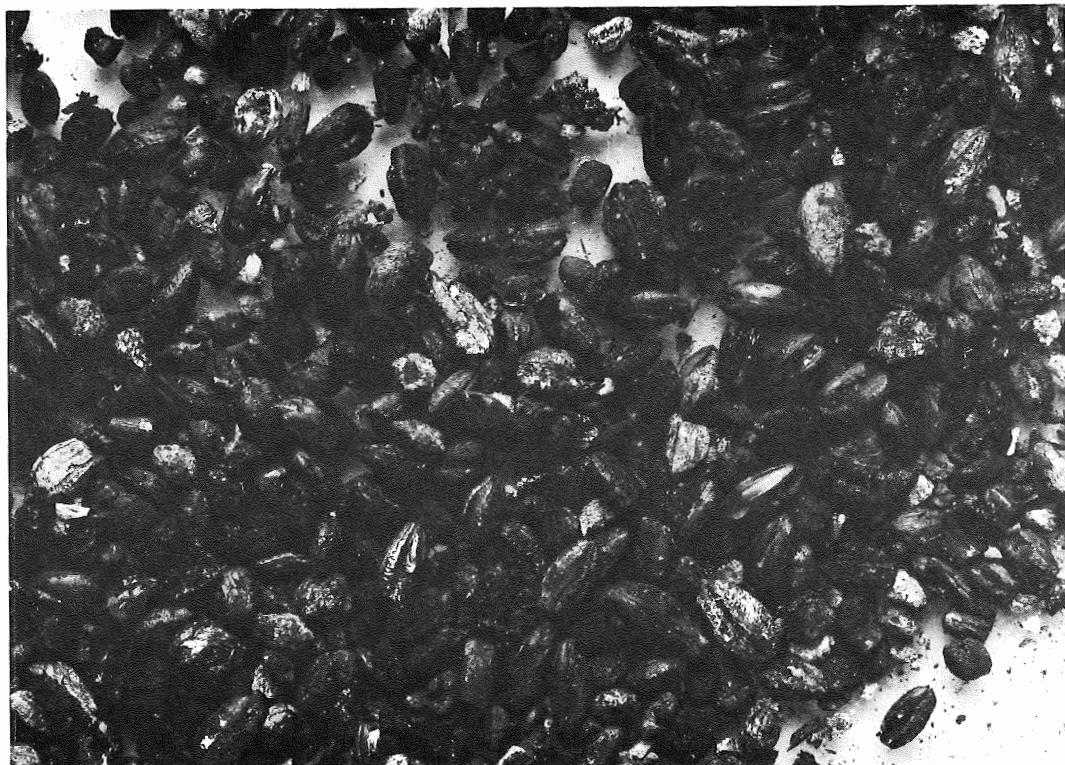


写真1 C地点木灰層採集の炭化麦

よう。

C地点の木灰層は採集土器の量的関係や木灰層中に包含された土器からB式土器の時期に形成されたものである。従って、類須恵器I類(A I式、B式、無文)、炭化麦、米、穀穀はB式土器に共伴したものとみなければならない。更に、B地点の滑石片の存在や、滑石を混和材とした石鍋形土器(B式)から、B式土器には石鍋も共伴していたとみることができる。そして、大量の炭化麦、米、穀穀の存在から、B式土器の時代には麦を主体として麦、米栽培農耕が行われていたことも明瞭だろう。

A式土器に確実に共伴したといえる遺物はA地点の貝層からA式土器と共に採集されたヒメジャコ貝錘とヤコウガイ製品であり、その貝層もA式土器の時期に属するものである。類須恵器I類がA式土器に共伴することは、型式学的に類須恵器I類の最古型式であるA I式がB式土器に共伴したことから考え難いことである。

1表 ヤジャーガマ遺跡遺物集計表

遺物		地点	A	B	C	計
土器A 型式	口 縁 部		9	5	12	26
	胴 部		61	11	67	139
	底 部		1		2	3
	小 計		71	16	81	168
土器B 型式	口 縁 部		2		50	52
	胴 部		42	41	667	750
	底 部		5	3	14	22
	小 形		49	44	731	824
類須恵器			21	3	18	42
滑石片				1		1
ガラス玉					1	1
土器B 型式 器形 分類	甕				7	7
	鉢				9	9
	壺				11	11
	碗				1	1
	甕又は壺				18	18
	不明	1			6	7
類須恵器 類	I	A I式			1	1
		B式	1		1	2
		無文			2	2
		不明	1			1

II、ヤジャーガマA、B式の編年の位置

1. ヤジャーガマA式の位置

グシク時代の土器はフェンサ城貝塚の層位関係においてフェンサ上層とフェンサ下層式に区分されている（友寄、嵩元1969：60～70）。グシク時代初期に位置づけられているフェンサ下層式は先行する貝塚時代後期土器の手法を引き継ぐ土器型式でありながら貝塚時代後期土器と区別されている。その理由としては土器型式的差異の他に類須恵器の共伴及び丘陵上立地であることが挙げられている（友寄、嵩元1969：69～70）。フェンサ下層式の時期は後期同様顕著な貝層を形成する点や土器型式、貝製品等、生産基盤、文化様相の上で貝塚後期的であるが、遺跡の立地、共伴遺物、特に類須恵器の登場は米、麦栽培農耕の展開と関連するとされるだけに貝塚時代にはみられなかったグシク時代的特徴を持つこと等からグシク時代初期に位置づけられるのである。

ところで、フェンサ下層式土器と同様な条件（後期系土器+類須恵器+丘陵上立地）にある遺跡がその他にも多く知られている。ヤジャーガマ遺跡もその例であるが、他にも勝連城南貝塚、中部具志川グシク遺跡、真栄里貝塚が発掘によって確認されている。未発掘例としては具志頭グシク貝塚がある。類須恵器の共伴は知られていないが、丘陵地帯に立地し土器型式上も上述の遺跡とほぼ同時期と考えられている遺跡としてガラビ濠遺跡がよく知られている。その他の例は2表を参照されたい。

これらの遺跡の土器はフェンサ下層式土器と型式的にいかなる位置関係にあるかを、発掘報告がなされた勝連城南貝塚の後期系土器、ヤジャーガマA式土器を中心に検討しよう。

勝連城南貝塚の後期系土器（新田1966）

勝連城南貝塚はI、II、III層の文化層が確認された。I、II層はフェンサ上層式系統の土器が土器の半数近くを占め、類須恵器、輸入陶磁器が共伴している。III層では後期系土器が圧倒的主体を占め、類須恵器が共伴している。貝塚後期系土器の有文土器の比率は口縁部破片でみると、約50%と高い。有文土器片の文様は①口唇上刻目、②刻目のある凸帶文、③波状又は鋸歯状などの浅い沈線文、④刺突文、⑤爪形文、⑥押捺刻文などの組合せで構成されている。口唇上刻目と波状又は鋸歯状の浅沈線文が主たる文様要素である。他には刻目のある凸帶文もフェンサ下層式やヤジャーガマ式にはみられない特徴である。

底部はいわゆる“くびれ平底”が多い。だが尖底も若干存在する。

フェンサ下層式土器（友寄、嵩元1969）

フェンサ城貝塚A、Bピット第III層（下層）で排他的に出土した貝塚後期系土器で類須恵器を共伴している。その特徴は次のとおり、

有文土器片の比率は口縁部破片でみると2%弱で無文化が進んでいる。しかし、施文具による文様に代って、刻目のない凸帶、口唇上山形小突起、鞍状凸帶が約7%の率で存在する。特に口唇上山形小突起が多く、フェンサ下層式の特徴となっている。

底部はすべて平底で尖底はみられない。

ヤジャーガマA式土器

ヤジャーガマA式はほとんど無文化し、凸帶等の装飾もないことが特徴といえようか。有文土器の3片は胎土、器形上特殊な土器である。無文土器は口縁の外反度が弱く鉢形的形態に近いことも特徴であ

る。

上述3遺跡の土器は相互に異なる特徴を持つことから明瞭に型式的に区別し得る。仮りに、勝連城南貝塚の貝塚後期系土器を、第III層（下層）で主体をなすことで南下層式と呼ぶことにしたい。南下層式、フェンサ下層式、ヤジャーガマA式は、先行する貝塚時代後期の砂丘遺跡の土器特徴を基本形としておけば、尖底消失、無文化の傾向として、南下層式→フェンサ下層式→ヤジャーガマA式の順に型式的編年が可能である。つまり、南下層式の文様や尖底には、貝塚後期の砂丘遺跡の土器（例えばアカジャンガ一貝塚、具志原貝塚等）と共通するところが多い。これがフェンサ下層式の段階では、有文の激減によって刻目ない凸帯が残り、また口唇上山形小突起が隆盛となり、尖底もほとんどなくなる。そしてヤジャーガマA式の段階では凸帯や口唇上山形小突起も衰退し全くの無文土器となる。

これらの三型式に照らして他の丘陵地帶立地の貝塚後期系土器を検討すると、ガラビ濠遺跡の土器は、嵩元氏の図示した資料（嵩元1970：3図）や琉球大学考古研蔵の採集品ではほとんど無文で、1片だけ口唇上山形小突起のある土器があることからフェンサ下層式～ヤジャーガマA式に対比される。

中部の具志川グシクの貝塚後期系土器は、私の採集品と新田氏の報告（新田1974）をあわせると、口唇上刻目のある凸帯文、波状または鋸歯状の沈線文が高い瀬度で得られていることから南下層式に対比しうる。

具志頭グシク貝塚後期系土器（安里採集品）はほとんど無文で尖底もないことから、ヤジャーガマA式に対比されよう。

これらの遺跡の土器の型式的位置づけは更に資料を増加させるか発掘によって決定すべきであるが、大略、先の三型式にそれぞれ対比させることも可能であろう。

なお、この三型式の編年は型式学的なものであり、層位的に、或は共伴遺物の上ではまだ確認されていないから、同時期における地域的型式差の可能性も一応考えられる。しかし、各型式に対比される土器の分布が地域性をつくらないことからそのことは考え難い。

2. ヤジャーガマB式土器の位置

後期系土器に後続するグシク系の土器は従来フェンサ上層式と呼ばれてきた。フェンサ上層式土器は友寄、嵩元氏らによって、フェンサ城貝塚A、B上層（II層）に出土したグシク系土器を標準として設定されたものである。その特徴は、安定した平底の鉢形又は壺形の土器で、胎土には白色砂粒が添加されている土器である。無文であるが口唇部に瘤状突起が付けられた例が多い。器種は壺と内彎状の鉢があるという。共伴遺物には類須恵器、輸入陶磁器、鉄器等がある。

ヤジャーガマB式は形態的にフェンサ上層式と同一系統にあるが次の点で明確に区別される。①頸のある壺形土器が鉢、壺と並んで主要な器種であること。②口唇部には瘤状突起ではなく、代って小さな外耳状把手が鉢形土器の胴部に付けられている例がある。③底部は平底、平丸底の他に丸底がある。④製作手法としては混和材に白色砂粒等を用いない。⑤ヘラ削りが主要な器面調整手法となっている。

時期としては、共伴遺物が類須恵器I類であり、また輸入陶磁器を伴なわないことからフェンサ上層式に先行するグシク系土器である。もちろん、ヤジャーガマA式に後続するものである。

III 類須恵器の年代、共伴する土器型式

1. 類須恵器の年代

琉球に広く分布する類須恵器を佐藤氏は、文様の簡略化(無文化)、口縁部の作りの簡素化、器壁の叩き締め技術の退化等の相連関する変化から、類須恵器の有文を A I → A II → A III → B 式として、型式の分類と型式学的編年を行っている（佐藤1970）。

私は沖縄各地の類須恵器の口縁及び類須恵器 102片を検討した結果、佐藤氏の指摘した変化の傾向を確認した上で、一步進めて、口縁形態によって大きく 2 類に分類した方が良いと考えている。すなわち、I 類は、口縁の作りは手が込み頸はぐっと外反している。一般に薄手である。有文はこの I 類に限られる。但し、波状文が極めて萎縮した B 式には II 類に属するものもある。また、I 類に無文も存在する。II 類は口唇の作りが簡単で、頸は直口的で器型は厚くなり、無文である。

類須恵器 I 、 II 類の先後関係は佐藤氏が指摘した変化の傾向によって型式学的に可能であるばかりでなく、ヤジャーガマ遺跡において I 類には輸入陶磁器が共伴せず、宮平遺跡（1970年沖縄考古学研究会連合発掘、近く報告予定）や糸数城跡(安里1969)、ヒニグシク（嵩元1966）では、類須恵器 II 類に磁器が共伴していることからも I 類→II 類という編年は明確である。

類須恵器 II 類に共伴する磁器に南宋の珠光青磁が確認されている。例えばヒニグシク（佐藤1970：16）の他、稻福遺跡の殿広場（B 地点）でも確認された（第4次発掘）。珠光青磁は日本では鎌倉時代に流布することからそれと共に共伴する類須恵器 II 類も13世紀頃に位置づけられる。

類須恵器 I 類の年代の決め手になる資料として石鍋がある。日本の石鍋出土例を検討した佐藤氏は石鍋の年代を平安後期～鎌倉時代においている（佐藤1970：182～183）。白木原氏は類須恵器に伴なう石鍋は長崎、佐賀方面の製品とし、その最も盛んに使用された年代を平安時代末～鎌倉時代にあったと述べている（白木原1974：33）。石鍋の年代は平安後期～鎌倉時代にあったことは日本側の研究者の一致した見解のようである。

類須恵器と石鍋が共伴した例は、宇宿貝塚、喜界島志戸樋七城がある。宇宿貝塚の場合、II～V 層において類須恵器と石鍋が共伴しているが類須恵器の型式は明らかでない。七城の場合、類須恵器 I 類 A I 、 A II 、 B 式及び波状文が萎縮し II 類に近い口縁をもつ 1 個と、 II 類の無文が石鍋、青磁等と共に伴している。だが類須恵器のどの型式と石鍋が共伴したかは不明である。

佐藤氏は七城の例について、朝仁貝塚では類須恵器の有文は出土せず厚手無文であったように思うことから石鍋はや、新しい型式の類須恵器（B 式又は II 類か）に伴なう可能性が強いとしている（佐藤1970：184）。類須恵器 II 類が珠光青磁（鎌倉時代）と共に伴するからには類須恵器 II 類が石鍋と共に伴することは充分にありうることである。

ヤジャーガマ C 地点において、石鍋形土器を含むヤジャーガマ B 式土器が類須恵器 I 類と共に伴していることは、石鍋は類須恵器 I 類とも共伴することを意味している。ここでも I 類のどの型式と石鍋が共伴したかが一応問題になる。しかし、ヤジャーガマ C 地点の状況は、逆に、類須恵器 I 類の有文各型式が果して年代差を持つのかという疑問を投げかける。

ヤジャーガマ C 地点はヤジャーガマ B 式土器の時期(一型式)に形成され、しかも層が僅か 1 cm 前後しかないことは同地点が短期間に形成されたことを意味している。類須恵器 I 類の古型式が伝世品でない限り、類須恵器 I 類+石鍋+ヤジャーガマ B 式という共伴関係でおさえておくべきであろう。従って、

類須恵器 I 類の年代は平安時代後期と位置づけられる。

2. 類須恵器 I 類と共伴する土器型式

従来、類須恵器はフェンサ下層式等の貝塚後期系土器と共に伴すると考えられていたことはすでに述べた。これに対しヤジャーガマ C 地点の状況からは、類須恵器 I 類の古型式が伝世品でない限り、類須恵器 I 類はヤジャーガマ B 式や石鍋と共に伴するのであり、貝塚後期系土器との共伴は考え難い。従って、類須恵器と貝塚後期系土器との共伴が層序的に確認されたといわれるフェンサ城貝塚（友寄、嵩元1969）、勝連城南貝塚（新田1966）を再検討する必要がでてくる。

両遺跡とも貝塚後期系土器と類須恵器の層（下層）の上にグシク系土器と類須恵器、輸入陶磁器の層（上層）が堆積し、この上層のグシク系土器が下層にも混在している。南貝塚の場合、下層（III層）に85片混在し、フェンサ城貝塚下層（A、B ピット III 層）では25片のグシク系土器片が混在していた（フェンサ城貝塚は私が土器を再整理して調べたもの）。下層におけるこれらのグシク系土器は上層からの混入とみられ、従って下層の類須恵器もグシク系土器と共に上層から混入した疑いが残る。

土器型式上、フェンサ下層式ないしジャーガマ A 式に対比されるガラビ濠遺跡は、グシク系土器を伴なわず貝塚後期系土器のみであり、また、類須恵器の採集は未だない。ガラビ濠遺跡の類須恵器の有無の問題は将来の発掘によって確定されねばならないが、類須恵器と後期系土器が共伴しないことを消極的ながら示唆しているといえよう。更に、後述するが貝塚時代後期の砂丘遺跡の中には丘陵地帯の後期系土器に対比しうる土器を出土する遺跡があり、この場合も類須恵器は共伴していない。

このように、貝塚後期系土器と類須恵器の共伴に多くの疑問を残す例がある以上、ヤジャーガマ C 地点の結果をふまえ、C 地点の類須恵器が伝世品でない限りにおいて類須恵器 I 類はヤジャーガマ B 式土器に共伴したと考えるべきではなかろうか。

IV 丘陵地帯への移住をめぐる若干の問題

1. 丘陵地帯移住の跛行的展開

海岸砂丘から丘陵地帯への移住は貝塚後期系土器の段階に行われたがそれは一挙に行われたのであろうか。

丘陵地帯遺跡の貝塚後期系土器は南下層式、フェンサ下層式、ヤジャーガマ A 式等の型式があった。これらの各型式は海岸砂丘上の貝塚後期の遺跡にも認められる。南下層式は、アカジャンガー貝塚（高宮1960）、熱田貝塚（高宮1969）、具志原貝塚（友寄、高宮1968）等の土器と、押捺刻文、爪形文、刺突文、刻目のある凸帶文、鋸歯状又は波状の浅沈線文、尖底など多くの点で共通する。南貝塚はこれらの遺跡より後まで継続したとしても、少なくとも平行した時期を考えねばなるまい。

南下層式よりも新しい型式のフェンサ下層式の特徴（刻目のない凸帶や口唇上山形小突起）をもつ土器は熱田貝塚や渡嘉志久貝塚（沖大文協1967：8～12）で得られている。更に、この二遺跡でフェンサ上層式に酷似した土器（口唇上に瘤状突起のある平底の内彎鉢形土器）が出土または採集されている。熱田貝塚は有文土器の頻度が低く、尖底も出土していないことから南下層式よりも後まで続いたと考えられる。

また、久米島北原貝塚からは口唇上に山形小突起をもつ土器が出土したと聞くが、そうであれば、そのテリトリーである礁湖との対応関係から、ヤジャーガマ遺跡は北原貝塚から移住してきたと考えられることと土器型式上も矛盾しない。つまり、ヤジャーガマ遺跡を残した集団はフェンサ下層式の時期まで北原貝塚に居住していたと考えられるのである。

このような、丘陵地帯遺跡と砂丘遺跡の間の土器型式の対応等は、丘陵地帯への移住が一挙にではなく跛行的に展開したこと意味しよう。

2. 洞窟居住

グシク時代の開始前後にはヤジャーガマ遺跡のように洞窟に居住する傾向がある。2表は管見の及ぶ

2表、貝塚時代後期末～グシク時代初頭の丘陵地帯遺跡

	遺 跡 名	出 土 土 器	共 伴 土 器	調 査 者
洞 窠 遺 跡	粟国島	松尾原洞 後期系土器、グシク系土器		沖大文協
		長作原洞 後期系土器		"
		草戸原洞 後期系土器、グシク系土器		"
		エーガー洞 グシク系土器	類須恵器	安里
	具志頭村	新里洞 後期系土器、グシク系土器		多和田
		ガラビ濠 後期系土器		"
		十柱洞 後期系土器、グシク系土器		"
	玉城村前川下川洞	玉城村前川下川洞 後期系土器、グシク系土器		"
		竜の宮洞 グシク系土器		"
		三様洞 後期系土器、グシク系土器	類須恵器	"
	浜比嘉島	大あぶ洞 グシク系土器		"
		金武洞 グシク系土器		"
		場屋洞 グシク系土器		"
		久米島ヤジャーガマ ヤジャーガマA、B式	類須恵器 I類	安里、知名
	読谷村チビチリガマ	後期系土器		多和田
		宜野湾市賀数洞 後期系土器		比嘉ハツ
		天川洞 グシク系土器		多和田
丘陵上遺跡	糸満市フェンサ城貝塚	フェンサ下層式、同上層式	類須恵器、陶磁器	友寄、嵩元
	真栄里貝塚	後期系土器、グシク系土器	" "	
	シマタイン殿	後期系土器、グシク系土器	" "	安里
	具志頭村具志頭城	" "	" "	安里、多和田
	玉城村垣花村落	" "	" "	安里
	勝連村勝連城南貝塚	南下層式、グシク系土器	" "	新田
	具志川市具志川城	後期系土器、グシク系土器	" "	安里、新田
	渡名喜島里貝塚	" "	" "	安里

限りの、貝塚後期系土器を出土する丘陵上遺跡とグシク時代開始前後の頃と思われる洞窟遺跡である。洞窟遺跡の資料は表面採集品であり、数量が少ないので時期決定は問題を含んでいる。貝塚後期系土器のみを出土する遺跡は問題はないが、グシク系土器を出土する洞窟遺跡の終末時期決定は資料的限界がある。しかし、すべての洞窟遺跡に輸入陶磁器が伴なわないことからすれば、これらの洞窟遺跡の多くが輸入陶磁器登場以前の遺跡と考えてよいであろう。2表の洞窟遺跡が上の理由からすべてグシク時代開始前後（輸入陶磁登場以前）とすれば、その頃の遺跡の約7割が洞窟に形成されていたことになる。貝塚後期系土器を伴なう丘陵地帯遺跡に限定しても半分以上が洞窟に形成されている。

これを地域的にみると、粟国島や浜比嘉島、具志頭村、などのような自然の洞窟に恵まれた地域では、グシク時代開始期の遺跡はほとんど洞窟に形成されていることがわかる。このような事例から、貝塚時代後期の砂丘集落が丘陵地帯へ移動する際に、洞窟に好んで居住し、その傾向はグシク時代初期まで続いたことが想定される。

では、この洞窟居住の意味は何か。グシク時代開始前後の時代をみても、洞窟居住は特殊な事情下の生活形態といわざるを得ない。洞窟居住はすでに貝塚時代中期頃には稀なのであるから。2表のグシク時代開始期の遺跡の存続期間をみると、丘陵立地の遺跡のほとんどがグシク時代末まで継続したと考えられるのに対し、洞窟遺跡は貝塚後期系土器の段階で放棄されるか継続してもグシク時代初期までであったことがわかる。洞窟遺跡の居住期間が短いことや、洞窟の持つ性質——一時的居住に便利だが湿気等の点で長期居住には不向き——からして、グシク時代開始期の洞窟居住は一時的居住を目的としていたことが考えられる。

3表、貝塚時代後期後半～グシク時代前半頃の土器型式編年と遺物、遺跡

世紀	土器型式	主な共伴遺物	丘陵地帯遺跡	砂丘遺跡
13 グシク系土器	フェンサ上層式	陶磁器(珠光青磁) 類須恵器II類	ヒニグシク 船越A遺跡 稻福上御願	
12	ヤジャーガマB式	石鍋 炭化麦、米 類須恵器I類	ヤジャーガマC地点	
貝塚後期系土器	ヤジャーガマA式	ヤコウガイ製碗状品 彫画貝札 ヒメジャコ製貝錘	具志頭グシク ヤジャーガマA地点貝層 ガラビ濠 フェンサ城貝塚下層 中頭具志川城 勝連城南貝塚	渡嘉志久貝塚の一部 北原貝塚の一部 熱田貝塚の一部 アカジヤンガー貝塚の一部
	フェンサ下層式			
	南下層式			

結び

本稿では、ヤジャーガマ遺跡の調査結果とそこから導き出される貝塚後期末～グシク時代初頭にかけての若干の現象について検討した。これらを整理すると次のようにまとめられる。

貝塚後期系土器を持続しつつ丘陵地帯へ居住した時期 丘陵地帯への移住は跛行的に展開し、居住地

には洞窟が好んで選ばれたがこれは一時的居住が目的だったと考えられる。この時期の類須恵器の広布は疑問である。つけ加えるならば、この時期の遺跡立地は海（礁湖）に近いことが一つの条件であり、顕著な貝層を形成することから生産基盤は貝塚後期的漁撈を引き継いでいたと考えられる（安里1974：73）。また、文化的にも、貝塚後期系土器、ヤコウガイ製碗状製品、彫画貝札などが出土しており貝塚後期文化の範疇にある。

グシク系土器（ヤジャーガマB式）と類須恵器I類の時期 類須恵器の広布はこの時期に石鍋を伴なって行われた可能性が強い。麦、米栽培農耕も本格的に行われていた。この時期は平安時代後期頃に当る。

輸入陶磁器登場期 磁器の方が南蛮系陶器に先行して登場する（安里1972：7）。磁器の中で確認しうる最古のものは南宋の珠光青磁等がある。類須恵器II類が登場する。集落は島内部丘陵上に展開していく。磁器の登場は珠光青磁から13世紀頃（鎌倉時代前半）と考えられる。

類須恵器の広布が麦・米農耕の展開と関係することはヤジャーガマ遺跡の調査から一層明確になった。問題は類須恵器広布の時期である。私はヤジャーガマ遺跡C地点の状況から平安時代後期、ヤジャーガマB式土器の時期と考えた。貝塚後期系土器を持続する丘陵地帯居住期に類須恵器の広布がなかったことは、その時期の生産基盤や文化遺物が貝塚後期的で新しい文化の波を認め難いこと、そして、丘陵地帯への移住の跛行的展開は丘陵地帯への移住が外的要因によるものではなく各集団（漁撈共同体）の内部事情が主因と考えられることなどからも想定しうることである。

こうした理由から、類須恵器の広布を南島経営と結びつける従来の想定は検討されねばならないだろう。また、フェンサ下層式の時期をグシク時代へ含めることも再検討を要しよう。代って、平安時代後期末の日宋貿易の隆盛が類須恵器広布とグシク時代開始の外的要因として、我々の検討すべき課題に上って来る。また、貝塚後期系土器を持続しつつ丘陵地帯へ移住する現象も、その時期における外的影響を反映する遺物が少ないとから、貝塚後期の内的要因を中心に検討する必要がある。

引 用 文 献（五十音順）

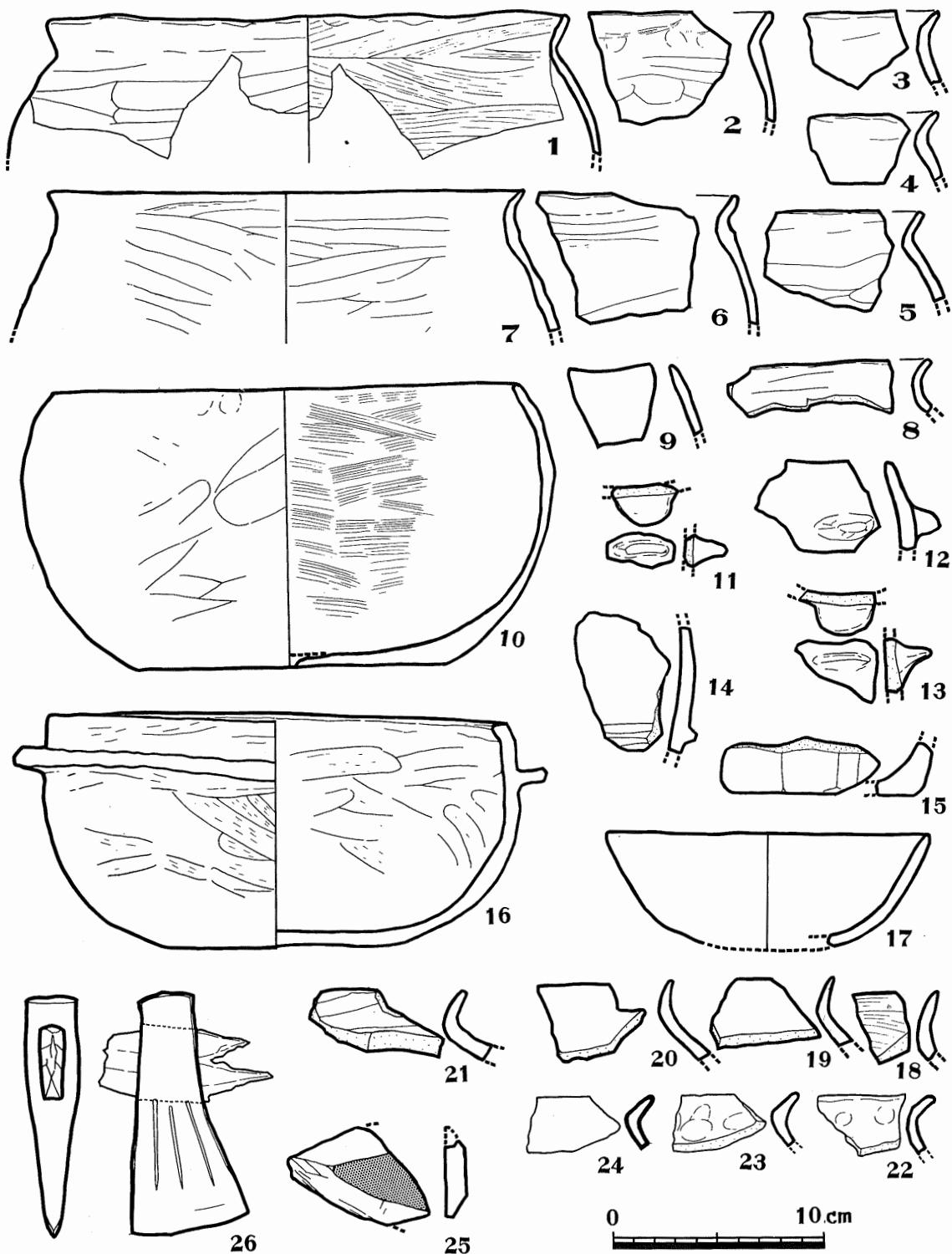
- 安里進 1969 「沖縄の炭化米・大麦出土遺跡」『考古学ジャーナル』32、
—— 1972 「琉球における原史時代の編年」『琉球新報』12月5日～27日
—— 1974 「沖縄における原始共同体の解体過程（試論）」『沖縄歴史研究』11号
沖縄大学学生文化協会 1967 「渡嘉敷島の先史遺跡」『郷土』4号
—— 1968 「久米島に於ける先史及び原始遺跡概要」『郷土』7号
国分直一 1972 『南島先史時代の研究』慶友社
佐藤伸二 1970 「南島の須恵器」『沖縄の社会と習俗』窪徳忠編 東大出版会
白木原和美 1971 「陶質の壺とガラスの玉」『古代文化』23号
—— 1974 「奄美の歴史1先史時代」『奄美文化誌』長沢和俊編 西日本新聞社

- 高宮広衛 1960 「具志川村アカジャンガー貝塚調査概報」『文化財要覧1960年版』琉球政府文化財保護委員会
- 1969 「恩納村熱田貝塚調査概報」『沖大論叢』9卷1号 沖縄大学
- 嵩元政秀 1966 「ヒニ城の調査報告」『琉球文化財調査報告書』琉球政府文化財保護委員会
- 友寄英一郎・高宮広衛 1968 「伊江島具志原貝塚調査概報」『琉球大学法文学部紀要』社会篇12号 琉球大学法文学部
- 友寄英一郎・嵩元政秀 1969 「フェンサ城貝塚調査概要」『琉球大学法文学部紀要』社会篇13号 琉球大学法文学部
- 新田重清 1966 「城跡南貝塚」『琉球文化財調査報告書』琉球政府文化財保護委員会
- 1974 「具志川市具志川城跡表採の考古資料について」『沖縄県立博物館館報』No.7 沖縄県立博物館



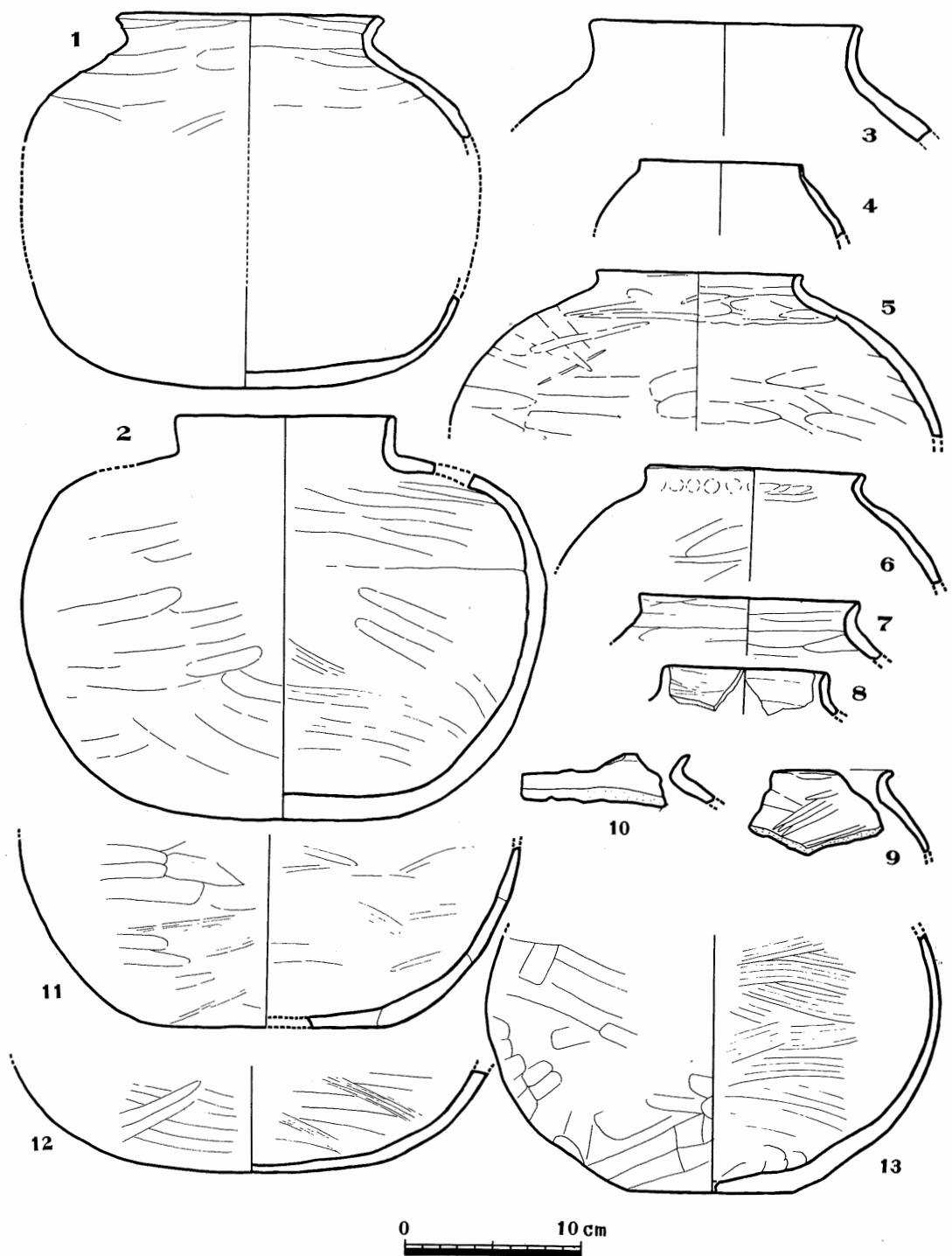
3図 ヤジャーガマA式土器、貝製品

無文土器(A地点1~6、29; B地点7、8、9; C地点10~23、27、28)。特殊有文土器(A地点26; B地点24、25)
ヒメヤコ製貝錘(A地点30)。ヤコウガイ製碗状品(A地点31~33)



4図 ヤジャーガマB式土器、鉄斧、滑石片

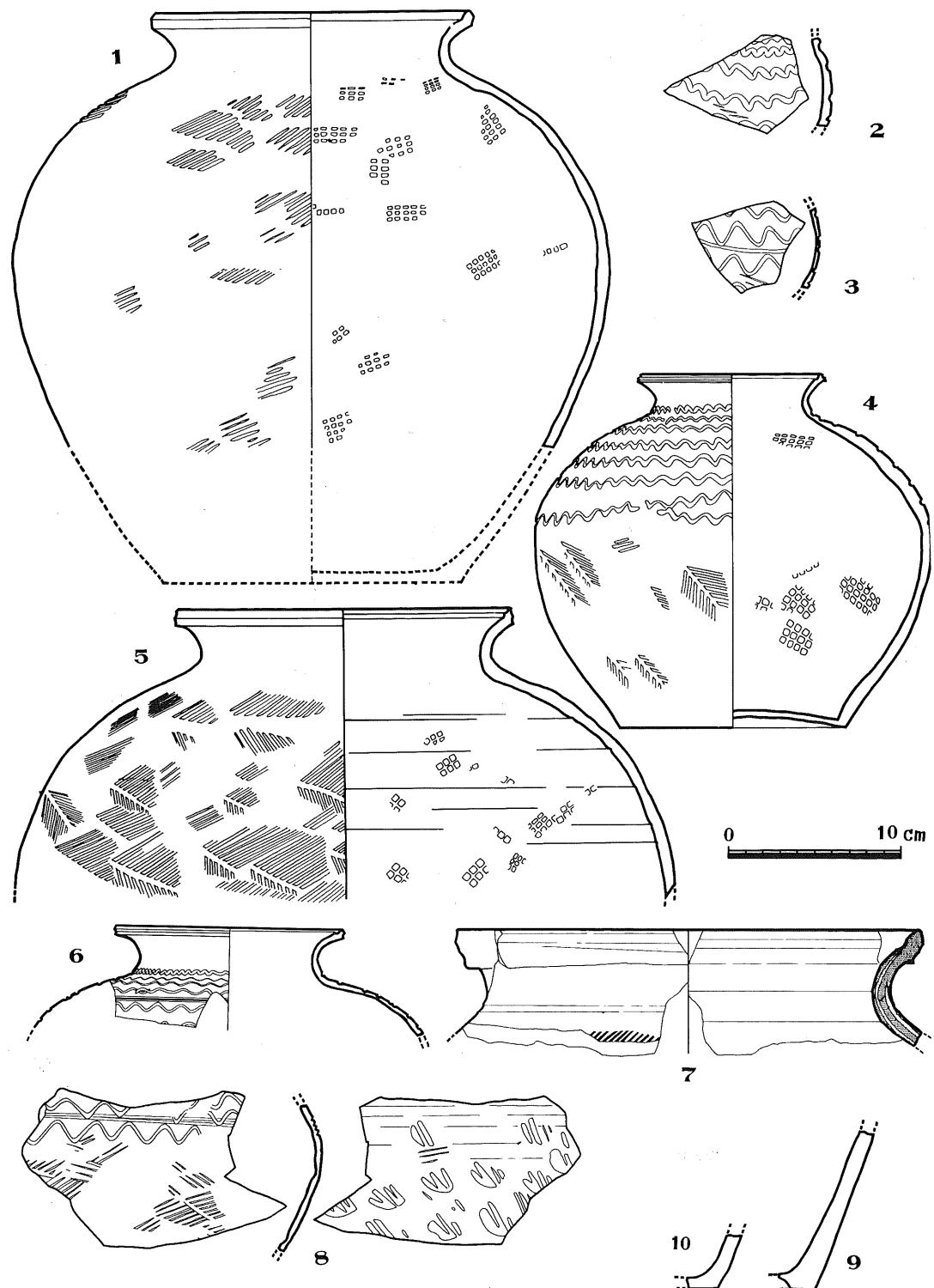
甕形土器(C地点1~8)、鉢形土器(C地点9~13)、土鍋(C地点16)、石鍋形土器(C地点14、15)、
碗(C地点17)、甕又は壺(C地点18~24)、鉄斧(C地点26)、滑(B地点25)。



5図 ヤジャーガマB式土器（壺及び底部）

壺（C地点2、3、5～10；B地点1；A地点4）

底部（C地点11～13）



6図 類須恵器

A地点7; B地点2、9、10; C地点1、3~6、7